

## 精神分裂病者の服薬の体験

- 知名めぐみ（高知医科大学医学部附属病院）  
小原亜紗子（高知医科大学医学部附属病院）  
高橋真紀子  
山崎浩子（医療法人近森会近森病院第二分院）  
吉本麻里（長谷川病院）

### 1. はじめに

精神分裂病者の社会適応には、服薬による患者自身のストレス耐性の向上が必要だと言われている。しかし八木らは、再発・慢性化と副作用の発見という危険にさらされながらほとんど永続的な服薬を余儀なくされている現状は深刻といわねばならないと述べ、精神分裂病者にとって服薬継続に伴う負担は大きいことを指摘している。このような状況の中で、患者の服薬に対する主体的な取り組みを支えるためには、援助者が開かれた態度で患者の主観的体験をくみ取り、患者が安心感をもてる体験を積み重ねることが重要になる。しかし精神分裂病患者の主観的病的体験についてはその科学的根拠が乏しいという理由で、精神医学研究の対象としては一部の研究を除いてこれまで必要以上に軽視されてきたように思われる。本研究は、精神分裂病者が服薬するという経験の中で、何を感じ、どのような思いを抱き、そしてどのような行動をとっているか、その主観的な体験の特徴を明らかにすることを目的に行った。精神分裂病者の服薬における主観的な体験を明らかにすることで、看護者の主観的なアセスメントだけではなく、精神分裂病者の視点に立ち、より1人1人に即した解釈ができるようになり、看護の方向性や有効なサポート方法がより明確になり、具体的な方策を打ち立てやすくなると考えられる。

### 2. 研究方法

対象者は病院併設のデイケアに通う精神分裂病者とし、研究の目的を説明し同意の得られた者とした。研究者らが作成したインタビューガイドを用いて、倫理的な配慮を行い、面接法によりデータ収集を行った。得られたデータは逐語記録し、質的帰納的研究方法を用いて対象者の言葉を重視しながら、彼等の服薬体験を分析した。

### 3. 結果および考察

今回の研究で、精神分裂病者の服薬体験の特徴として、下記の10のテーマが抽出された。

「テーマ1」 「人前で薬を飲むことで、社会から特別視され、嫌がられている精神分裂病者として自分を感じ、薬を飲まない限り自分は普通であるという思いを抱く。」

「テーマ2」 「普通の人のように仕事をしたり、誰かに必要とされる生活がしたいから薬を飲もうと思う。」

- 《テーマ3》「気になる症状が出ることで、身体が薬を飲まなければならないと訴えてくるように感じる。」
- 《テーマ4》「薬の種類が少ないからといって病気が治ったと判断するのではなく、生理的に感じる必要最低限のところまで安心して生活できるようになることが一番であると捉える。」
- 《テーマ5》「生活と薬の調節が上手くいかないと、服薬と生活が不規則になり、結局悪い方へ悪い方へいく傾向があると感じる。」
- 《テーマ6》「再発を防ぎたいという思いから、予防のために定期的に、または、先を見通して先手先手で薬を飲むようにしている。」
- 《テーマ7》「薬が効いているなど感じることでできないときもあるが、薬との長い付き合いの中で薬を飲むことが癖になっているので、飲み忘れない。」
- 《テーマ8》「薬に対する不安や疑問を感じたときは、仲間に聞くことによって不安な気持ちが和らぐと感じる。また、仲間の声は自分の行動に役立つ生の声だと感じる。」
- 《テーマ9》「自分の話を聞いてくれて自分を分かってくれる、また納得のいく説明をしてくれるような信頼できる医療者との関係性の中で薬に対する安心感を得る。」
- 《テーマ10》「特に自分自身が病気を理解していない時期には、病気ではない身近な他者に頼って、服薬に対する思いや行動が揺れ動いてしまう。」

本論では、精神分裂病者の主体的な服薬行動を支える上で重要であると考えられた《テーマ2》を中心に述べる。本研究では、10ケース中4ケースから、いずれは自分も元気になって普通の人と同じように働いて収入を得る生活をしたい、または今の職への責任を維持し、社会人としての生活を送りたいという思いが服薬を継続させているという特徴がみられた。これらのケースの中には、自分自身の社会や家庭での役割が明確になっていないことに対する不安や、普通の人のように働いて、そして人から必要とされる生活ができない自分に対して「このままでいいのだろうか」と疑問を抱えているケースもいた。しかし、このようなケースにおいても、仕事をすることで社会人として自立した生活を送りたい、また誰かを支えていくなどの役割を遂行したいといった普通の生活への希求が、服薬の動機付けにつながっていたといえる。現在の医療現場においては、服薬と精神分裂病者の生活は切り離して考えられていることが多い。しかし、Oremが「セルフケアは理性的生活を営む人間として存在するための活動である」と述べているように、セルフケアの一環である服薬という行動も理性的生活を営むためのものであることが言える。今回の研究結果から、精神分裂病者にとって最も大切なことは、いかに自分らしく、自立した生活ができるかということであり、服薬はそういった生活を送るための手段の一つと言えるのではないかと考えられた。